

〔論文〕

高校野球指導における新しい打者評価法の提案と教育的実践

An Examination on Educational Effects in High School Baseball by Introducing a New Battering Evaluation Method

朝 西 知 徳
ASANISHI Tomonori

高校野球は教育の一環である。教育活動においては、教育の過程および成果を数量的にとらえることが重要となる。従来の打者評価法（打率・出塁率）は、野球技術のみを計る指標であり、教育的な側面から選手を評価するまでには至らなかった。そこで、教育を重視すべき高校野球の指導者が用いるために、選手のチーム貢献度を教育的な側面から計ることのできる新しい打者評価法（純出塁率・仕事率）を開発した。指導者として夏の甲子園出場を果たせたことは、新しい打者評価法の導入と無関係ではないと考えている。今後は、提案した新しい打者評価法が、どのような社会心理的側面と関係性があるのかを確かめていきたい。

キーワード：高校野球、教育、新しい打者評価法

I はじめに

筆者は、1988年3月に大学を卒業してから、高校野球および大学野球の指導者として約30年（実働27年）、学生野球に携わっている（表1）。

表1 学生野球指導歴

学 校 名	期 間	役 職	備 考
山梨・日本航空高校	1988年9月～1988年12月	コーチ	社会科講師
茨城・鹿島学園高校	1991年4月～1992年3月	部長	国語科教諭 1989年4月創部
	1992年4月～1994年7月	監督	
鳥取・米子商業高校 鳥取・米子松蔭高校 (2001年4月に校名変更)	1997年4月～1997年7月	コーチ	国語科教諭 甲子園大会出場1回 中国大会出場6回
	1997年8月～2009年7月	監督	
大阪・羽衣国際大学	2010年4月～2010年5月	部長	体育学教員 Ⅲ部リーグ優勝4回
	2010年6月～2016年5月	部長・監督	
	2016年6月～2018年3月	部長	
大阪・羽衣学園高校	2018年4月～ 現在	監督	2018年4月創部

※部長3年（監督兼任の6年を除く）、監督23年4ヵ月、コーチ8ヵ月、計27年。

『学生野球要覧』には、「学生野球は教育の一環としての野球であるから、学業や人格の陶冶などとは切り離せないもの」という考えが示されている（廣岡 [1996] p. 6）。

筆者は、その言葉を胸に強く刻みながら、今日まで学生野球の指導に当たってきた。学生野球とは、高校野球および大学野球を指すが、とくに高校野球は、心身ともに発達過程の高校生が行うものであるから、教育の一環という意味合いは、より濃くなるであろう。

Ⅱ 高校野球と教育

『日本野球憲章』第1章総則（学生野球の基本原則）第2条①には、「学生野球は、教育の一環であり、平和で民主的な人類社会の形成者として必要な資質を備えた人間の育成を目的とする」と明記されている（八田 [2011] p. 21）。つまり、野球で鍛えた心身を社会有用なことに使って、日本の文化の向上に役立ててこそ意味があると考えられる（神田 [1977] p. 64）。

高校野球の指導者には、職業野球（プロ・社会人野球）の指導者とは一線を画した教育的な選手指導・配慮・起用が求められる。よって、甲子園出場は活動の目的ではなく、目標の一つにとどめておくべきであろう。

高校野球の指導者は、技術指導者ではないということを肝に銘じなければならない。高校野球が教育の一環であるという原則を忘れてはいけない。あくまでも高校野球の指導者は、教育者なのである（佐塚 [2018] p. 169）。

筆者は、「野球部活動を通じた高大連携の試み」として、2018年4月に創設された本学の併設校である羽衣学園高等学校（以下、羽衣学園高校）の野球部の監督に就任すると、人間教育を指導の柱に据えた（朝西 [2019] p. 85）（表2）。

表2 羽衣学園高等学校野球部の指針

項目	内容	総括
価値	礼儀正しい高校野球部 文武両道を目指す高校野球部 地域に根ざした育成型の高校野球部 皆から愛される高校野球部	人間形成
目的	野球を通して自己を磨き人生を切り拓く スポーツマンシップを養う 大学で通用する社会的技術を身につける	
目標	短期：夏一勝 中期：大阪ベスト8以上 長期：甲子園初出場	

Ⅲ 野球と数字

野球というスポーツの性質はデジタル的なため、データ収集が比較的容易である（鳥越 [2011] p. 197）。

日本のプロ野球（NPB）を例に挙げると、王貞治の通算868本塁打の世界記録、衣笠祥雄の2,215試合連続出場、金田正一の通算400勝、張本勲の通算3,085安打、福本豊の通算1,065盗塁といっ

た日本記録、さらにイチローの日米通算4,367安打のギネス世界記録など、野球は様々な数字に彩られている。打者の本塁打数や投手の勝利数など、プレー結果が数量化しやすいことは野球の大きな特徴である。

野球以外で、数字がこれほどまでに重大視され、脚光を浴びるスポーツは他に例がない（ウインフィールド [1994] p. 184）。野球に携わる人々や野球を愛好する人々は、数字で表される野球選手の競技成績に大きな関心を抱いており、野球の本場アメリカでは、野球統計学という学問さえ存在する。

Ⅳ セイバーメトリクス

ビル・ジェームズは、野球草創期から蓄積されたデータを統計学の視点から分析することによって、新しい選手評価法や戦術・戦略を提案するセイバーメトリクスを確立した（表3）。アメリカ野球学会（Society for American Baseball Research）の略称「SABR」と測定基準の「metrics」が、セイバーメトリクス（Sabermetrics）の語源となる（データスタジアム [2008] p. 16）。

表3 セイバーメトリクスが生んだ新しい打者評価法の例

指標	評価する内容	算出式
OPS	打者としての総合的な能力は？	出塁率+長打率
SecA	出塁率に安打の内容を加味した打率は？	$(\text{塁打} - \text{安打} + \text{四球} + \text{盗塁} - \text{盗塁死}) \div \text{打数}$
TA	1アウトを取られるまでにどれだけ塁を奪えるのか？	$(\text{塁打} + \text{四球} + \text{死球} + \text{盗塁} - \text{盗塁死}) \div (\text{打数} - \text{安打} + \text{盗塁死} + \text{併殺打})$
RC27	27個のアウトまでに一人でどれだけ得点できるのか？	$(\text{RC} \times 27) \div (\text{打数} - \text{安打} + \text{犠打} + \text{犠飛} + \text{盗塁死} + \text{併殺打})$
IsoP	長打を放つ能力は？	長打率-打率
Powers-Speed-Number	パワーとスピードのバランスは？	$(\text{本塁打} \times \text{盗塁} \times 2) \div (\text{本塁打} + \text{盗塁})$
BABIP	運にどのくらい左右されたのか？	$(\text{安打} - \text{本塁打}) \div (\text{打数} - \text{本塁打} - \text{三振})$

従来の指標では見落とされていたり、過小評価されていたりした選手たちの本当の実力を発見できる新たな指標を基にして、選手の価値分析、選手の能力評価、選手の将来（成長）予測をすることが、セイバーメトリクスの主な目的である（鳥越 [2011] p. 16）。

セイバーメトリクスについて研究する人々は、セイバーメトリシャンと称される。メジャーリーグ（MLB）において初めてセイバーメトリシャンとしてテキサス・レンジャースに採用されたクレイグ・ライトは、新しい選手評価法の一つとして捕手防御率（CERA）を提案した。

野球の勝敗が得点の優劣により決定されることを考えると、唯一の捕手評価法であった盗塁阻止率は、捕手の能力を示す指標としては不十分である。ライトは、調整イニングという方法を取り、バッテリーを組んだ投手の能力や投球回数による格差をなくし、同じ条件のもとで同一チームの捕手陣のリード面に関する能力の優劣を図ろうと捕手防御率（CERA）を開発した（ライトら [1989] pp. 19-47）。

プロ野球（NPB）におけるセイバーメトリクスの活用法は、外国人選手や他球団の控え選

手を低予算で獲得するための手段であり、選手の評価や年俸の算出システムとして活用されるまでには至っていない（鳥越 [2011] pp. 198-199）。そう考えると、セイバーメトリクスを学生野球に導入するには時期尚早である。

V 従来の打者評価法

『公認野球規則』9.21「率の決定」には、打率、長打率、出塁率の順序で打者評価についての指標が示されている（日本学生野球協会 [2016] pp. 178-179）。

また、プロ野球（NPB）における連盟表彰の打撃部門は、首位打者（最高打率）、本塁打王、打点王、最高出塁率という順序で記されることが多く、打撃成績表は、打率をもとに順位がつけられている。

このように、野球界は未だ打率至上主義であり、首位打者が最も脚光を浴びている（功力 [1985] pp. 71-81）。つまり、打者評価を行う上で最も適当だと考えられている指標は、今のところ打率である。

なお、『公認野球規則』9.21「率の決定」に示してあり、かつプロ野球（NPB）における連盟表彰の対象となる打率と出塁率について、評価する内容と算出式は次のとおりである（日本学生野球協会 [2016] pp. 178-179）（表4）。

表4 従来の打者評価法

指標	評価する内容	算出式
打率	安打を放つ能力	安打 ÷ 打数
出塁率	安打を放つ + 四死球を選ぶ能力	(安打 + 四球 + 死球) ÷ (打数 + 四球 + 死球 + 犠飛)

『公認野球規則』5.08「得点の記録」(a)には、「3人アウトになってそのイニングが終了する前に、走者が正規に一塁、二塁、三塁、本塁に進み、かつこれに触れた場合には、その都度、1点が記録される」と記されている（日本学生野球協会 [2016] p. 47）。

また、『公認野球規則』1.06には、「正式試合が終わったとき、本規則によって記録した得点の多い方が、その試合の勝者となる」と記されている（日本学生野球協会 [2016] p. 1）。

つまり、走者を進塁させて本塁に近づけることは、チーム貢献度の高いプレーのはずである。ところが、打率の算出においては、四球、死球、犠打、犠飛、被妨害は取り扱われずに、進塁打、相手の失策（以下、敵失）、野手選択（以下、野選）を凡打として扱うため、選手のチーム貢献度を計るには不備な点がある。

同じく、出塁率においても、敵失、野選、被妨害などの実質的な出塁は取り扱われないため、実際の出塁によるチーム貢献度を計るには、これも不備な点が見られる。

VI 新しい打者評価法についての先行研究

従来の打者評価法には、一つの尺度・側面からしか計れない弱点がある（木下 [1992] p. 7）。

1961年にアメリカ統計学会誌に、野球統計学に関する研究論文を著したジョージ・リンゼイ

は、計算理論を応用して、得点期待値に関する打者評価法を提案した（鳥越 [2011] p. 14）。

ただし、理論的な根拠に乏しく、数学的に見ても動的（野球は動的であるため）ではないとされ、多くの支持は得られなかった（木下 [1992] pp. 7-9）。

しかし、打率・本塁打・打点などの代表的な指標だけが、信頼性のある打者評価法であると誰もが信じて疑わなかった時代に、このような試みをしたことは、いずれセイバーメトリクスや野球統計学という学問の礎になり、一つの革命ともいえた。

続いてコーバーとケイラーは、新たな打者評価法として「Offensive Earned Run Average (OERA)」を提案した。OERAとは、それぞれの選手が所属するチームの強弱による不平等さをなくし、同じ条件のもとで打者評価を客観的に行おうと試みるものであり、特定の打者が常に打席に立ち、九回まで攻撃したと想定して、どれだけの得点を生み出せるのかを計る指標である（木下 [1992] pp. 9-13）。

ただし、OERAについては、犠打は無視され、敵失・進塁打は凡打と同様に扱われるため、選手のチーム貢献度を計る打者評価法としては弱点があった。ところで日本には、「野球のOR (オペレーションズ・リサーチ)」というテーマで、OERAについて研究発表を行った人物がいた。当時、東京工業大学の助手を務めていた鳩山由紀夫氏。のちの総理大臣である（鳥越 [2011] pp. 14-15）。

功力靖雄は、攻撃時における諸々のプレー（116項目）について得点化を計り、打者評価を含めた試合における選手のチーム貢献度を攻撃ポイントとして表す「攻撃評価法」を提案した。野球の攻撃については、打者の打撃行為と走者の走塁行為により本塁へ生還し、得点が記録されるため、機動力を絡めた多様な攻めが駆使される。したがって、一本の安打を取り上げても、二死走者なしからの安打と二死二塁からの適時打とでは、試合におけるチーム貢献度に著しい差異が生まれる。攻撃評価法は、このような考えから開発された（功力 [1985] pp. 71-81）。

なお、この攻撃評価法は、のちにプロ野球（NPB）の西武ライオンズ（当時）、横浜ベイスターズ（当時）の選手査定に用いられることになった。プロ野球（NPB）のチームが採用するような秀逸な打者評価法ではあるが、授業と練習に追われる教員にとって、攻撃ポイントの算出に多くの時間と労力を費やすことは、現実的には難しいであろう。

Ⅶ 従来の打者評価法における犠打の扱い

高校野球は教育の一環である。教育活動においては、教育の過程およびその成果を数量的にとらえることが重要となる（大山正ら [1978] p. 58）。

繰り返すが、筆者が監督を務める羽衣学園高校の野球部の活動は、人間教育を指導の柱としている（表2）。犠打（送りバント）は「犠牲バント」とも称されるように、犠牲的精神が必要となる。よって人間教育には不可欠な戦術であろう。

筆者は、高校野球の監督として、練習試合で本塁打を放った選手の次の打席では、あえて犠打を命じることを意識してきた。大振りになってはいけないという技術的な意味合いもあるが、謙虚な気持ちでチームプレーに徹することを教育する絶好の機会だと判断しているのである。その場合の犠打は、かえってチームの士気を高めることにもつながっていた。

参考までに、鳥取・米子商業高等学校および米子松蔭高等学校（以下、米子商業高校または米子松蔭高校）で監督を務めた12年間に犠打を最も多く記録した選手は、チームの主将であ

り、司令塔の捕手であり、そして四番打者であった（高校通算181試合61犠打）。犠打は、高校野球における教育の象徴である（朝西 [2010] pp. 122-123）。

一方で、犠打をしたところで、得点確率や得点平均は上昇しない（加藤ら [2008] pp. 98-99）。また、統計学的な観点から見ても、犠打は損な作戦であり、必ずしも勝利に直結しない。セイバーメトリクスの最も代表的な打者評価法であるOPSでも、犠打は評価の対象とされていない（鳥越 [2011] p. 3, p. 60）。

しかし、自らがアウトになってもすべての走者を進塁させるという戦術は、教育の一環である高校野球にとっては、決して無意味なことではない。仮に得点期待値が下がったとしても、人間形成には大いにプラスに働くのではないか。または、チームの集団凝集性を高めるのではないか。犠打には、そういった精神面の効果が必ずあるはずだ。まさに教育の一環である高校野球には相応しい戦術だといえよう。

ところで、羽衣学園高校の野球部は、創部2年目となる2019年の秋の府大会一回戦で、公式戦初勝利を収めている。対戦相手は、同年夏の甲子園大会で優勝を果たした履正社高等学校に対して、夏の府大会において得点1-2と最も善戦した大阪電気通信大学高等学校であった。その強豪校に対して、ツーランスクイズ1本を含めた4犠打が初勝利を呼び込んだと、監督である筆者は理解している。

無死一塁では、犠打でも強攻策でも得点の可能性はあまり変わらないが、犠打を2個以上決めると勝率は高くなるという研究結果もある（川村ら [2007] pp. 24-25）。

VIII 新しい打者評価法「純出塁率」「仕事率」の提案

打率・出塁率よりも妥当性のある打者評価法があるのではないか。そこで提案するのが「純出塁率」「仕事率」という指標である（朝西 [1996] pp. 32-36、朝西 [2002] pp. 13-24）（表5）。

表5 新しい打者評価法

指 標	評価する内容	算 出 式
純出塁率	実質的な出塁能力	$(\text{安打} + \text{四球} + \text{死球} + \text{敵失} + \text{野選} + \text{被妨害}) \div \text{打席}$
仕 事 率	仕事をする能力	$(\text{安打} + \text{四球} + \text{死球} + \text{犠打} + \text{犠飛} + \text{進塁打} + \text{敵失} + \text{野選} + \text{被妨害}) \div \text{打席}$

従来の打者評価法である出塁率は、安打と四死球（四球+死球）のみによる出塁の能力を示す指標であった。しかし、敵失・野選・被妨害など相手のミスを誘うことも打者の能力であると考えられる。

例えば、全力疾走を続けている選手の打球を処理する場合、野手は無駄のない動きを求められるため、捕球ミスや送球ミスの生まれる可能性が高くなる。また、たとえ正面の打球であっても力のある打球については、捕球の難易度が上がるであろう。

そういった相手のミスによる実質的な出塁も、安打や四死球による出塁と変化する局面に大差がないことから、チーム貢献度は変わらないはずだ。いや、むしろ敵失・野選・被妨害は、安打・四死球よりも相手が受けるダメージは大きくなる。

なお、純出塁率を算出する場合、犠打飛（犠打+犠飛）と敵失、または犠打と野選がそれぞれ同時に記録されるときは、純出塁率という指標の性質を考慮して、敵失または野選として扱う。

また、従来の打者評価法である打率は、安打を放つ能力のみを示す指標であり、四死球が反映されないなど、一つの尺度・側面からしか計れないという弱点があった。

筆者は試合において、「自分の仕事をせよ」と選手に伝えることがある。インニングの先頭打者は出塁することが仕事をすることであり、次の打者は犠打などによって走者を進塁させることが仕事をすることであり、その次の打者は適時打で走者を本塁に返すことが仕事をするとして理解させている。つまり、「仕事をする」とは、実質的に出塁すること、走者を進めることが主な内容である。筆者は「仕事をする」ということを次のように定義した。

- ①実質的に出塁すること。
- ②自身がアウトになっても、すべての走者を進塁させること。
- ③得点が発生すること。

①については、純出塁率の提案で説明しているので省きたい。②は犠打や進塁打などがこれに該当する。③は適時打（犠打飛を含む）などがこれに当てはまる。③については、少し説明を加えたい。例えば一死満塁などで、打者が内野ゴロを放つとする。内野手が二塁経由の併殺を試みる。一塁走者が二塁でアウトになっても、打者走者は一塁でアウトにならないケースが生まれる。②と反して、すべての走者を進塁させられなかったケースである。その場合でも、三塁走者は本塁に還って得点が発生しているため、「仕事をする」と見なしてもよいということである。

なお、仕事率を算出する場合、犠打飛と敵失、または犠打と野選がそれぞれ同時に記録されるときは、純出塁率の場合とは異なり、仕事率という指標の性質を考慮して、犠打または犠飛として扱う。

Ⅸ 新しい打者評価法を用いた選手指導

1997年8月に鳥取・米子商業高校（現・米子松蔭高校）の監督に就任してから、提案した新しい打者評価法の一つである仕事率を重要視しながら、選手指導を試みた。

土・日曜日の練習試合（計4試合）を終えた翌月曜日（動的休養日）に、チーム記録と個人記録（投手・打者成績）を記した資料を選手たちに配布し、各々に課題を見つけさせた。

筆者は、「打率より出塁率が重要。それよりも純出塁率。さらに重要なのは仕事率だ。仕事率を上げることを意識すれば、甲子園も夢ではない」と繰り返し説いた。すると試合の中で選手たちが互いに「自分の仕事をしよう」と声を掛け合うことが多くなっていった。さらに、打率と仕事率の差異（上昇）を見ることによって、選手の努力度を測ることも可能とした（図）。

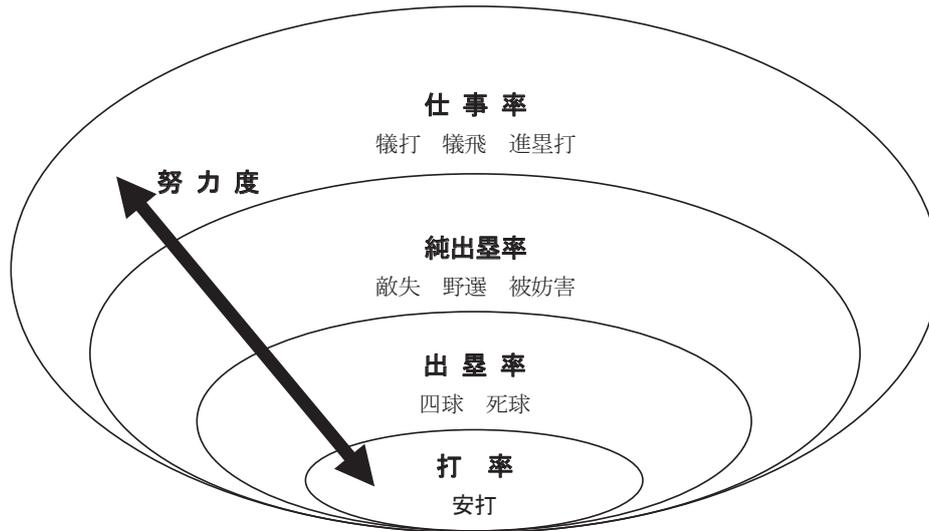


図 選手評価における指標間の関係

米子商業高校の監督に就いてから3年目の夏に、鳥取県出身の選手だけ(野球留学生ゼロ)で、夏の甲子園出場を果たせたことは、新しい打者評価法である仕事率の導入と無関係ではないと考えている。

2000年の夏に鳥取県代表として甲子園大会にベンチ入りしたメンバー(16名)の2000年前期(3月～7月の計52試合、39勝10敗3分、勝率.796)の打者成績を見ると、指標ごとに選手の順位が異なっていることが分かる。それぞれの指標成績の右横の数字は、ベンチ入りメンバー16名中の順位である(朝西 [2001] p. 67)(表6)。

表6 打者成績表(2000年夏の甲子園ベンチ入りメンバー)

背番号	学年	打率		出塁率		純出塁率		仕事率		努力度	
1	③	0.425	2	0.463	5	0.496	5	0.540	4	0.116	15
2	③	0.256	13	0.375	11	0.433	10	0.482	12	0.227	2
3	③	0.320	9	0.449	6	0.471	7	0.509	7	0.189	7
4	③	0.462	1	0.540	1	0.571	1	0.617	1	0.156	12
5	③	0.352	6	0.424	8	0.439	9	0.488	9	0.136	14
6	②	0.232	14	0.354	12	0.409	11	0.457	13	0.225	3
7	③	0.305	10	0.404	10	0.449	8	0.483	11	0.178	9
8	②	0.406	3	0.509	2	0.555	2	0.596	2	0.191	6
9	③	0.379	4	0.478	4	0.536	3	0.573	3	0.194	4
10	③	0.343	7	0.409	9	0.409	11	0.522	6	0.179	8
11	③	0.161	15	0.230	16	0.311	16	0.354	16	0.193	5
12	②	0.286	11	0.297	15	0.351	14	0.385	15	0.099	16
13	③	0.340	8	0.434	7	0.478	6	0.509	16	0.168	10
14	③	0.146	16	0.317	14	0.350	15	0.486	10	0.340	1
15	③	0.268	12	0.326	13	0.391	13	0.426	14	0.157	11
16	②	0.372	5	0.483	3	0.509	4	0.526	5	0.154	13
合計		0.331		0.427		0.466		0.510		0.180	

打率・出塁率・純出塁率・仕事率で、すべて1位となった背番号4（以下「背番号4」は「N4」と表記）は、中学時代は主戦投手として活躍。N4（身長173cm、体重67kg、右投げ右打ち）の出身中学校の先生方は、「彼が進んだ高校が甲子園に行くだろう」と評価するほど、N4は運動能力に優れており、これは妥当な成績だと思われる。実はN4は、この夏の大会直前の練習試合で死球を浴びて右手首を骨折した。高校では捕手に転向し、前年（1999年）の秋の県大会では準優勝、この年（2000年）の春の県大会では優勝に貢献している。夏の県大会では、背番号2番を背負い、三番二塁手として右手首にボルトを埋め込んだまま、全試合に出場。決勝では、左手一本で先制打を放ち、甲子園を大きく手繰り寄せた。

打率では16位（最下位）となったN14（身長161cm、体重51kg、右投げ右打ち）は、仕事率では10位と順位を上げている。注目すべきは、打率から仕事率への上昇を示す努力度では1位（首位）になっていることである。チーム最多の12犠打を記録。努力度を見ることによって、彼のチーム貢献度が明確になった。

努力度では2位となったN2（身長165cm、体重63kg、右投げ右打ち）は、この夏の県大会では背番号12。骨折したN4に代わっていきなり正捕手として県大会では全試合にマスクをかぶり、甲子園出場を決めたウイニングボールをつかんだ。チームで三番目に多い10犠打を記録。甲子園では新たに背番号2を背負ってフル出場を果たした。

努力度では3位となったN6（身長163cm、体重56kg、右投げ右打ち）は、この夏の県大会では背番号16。決勝では追撃点を与えたくない終盤の二死二塁の局面で、遊撃手であるN6の後方に放たれた小飛球を背走からのダイビングキャッチで甲子園を近づけた。それぞれチームで二番目に多い11犠打、9敵失を記録。甲子園では二年生ながら背番号6を背負って、浣漑とプレーした。

ところで、優れた体格を持っていることは、好成績を上げるための大きな近道である（ライアン [1992] p. 40）。つまり、形態（身長や体重など）と競技成績の関係性は深い。

打率から仕事率への上昇を示す努力度で上位となった3名（N14、N2、N6）は、打率ではいずれも下位（13位以下）であり、身長と体重いずれも甲子園メンバー16名の中では14～16番目の数値である。身体的不利な条件を精神力で凌いだと推察される。

仕事率を示すことによって、打率だけでは推し量ることのできなかった選手のチーム貢献度、あるいは努力度という物差しを使って選手の精神的な要素を計ることができるならば、選手の実態がより把握できるようになるであろう。

甲子園出場後も、筆者は新しい打者評価法である仕事率を重要視しながら、学生野球指導を続けている（新聞記事）。



新聞記事 朝日新聞(別刷) 西日本版 2002/07/18(木)

X おわりに

筆者は、2005年度から2015年度まで、広島・福山大学にて「スポーツ心理学」の非常勤講師を務めた。同時期に福山大学の客員教授を務めていた三村敏之氏（故人）からは、野球指導について多くのことを学ばせていただいた。

1975年10月15日、広島東洋カープ（以下、広島カープ）が念願のリーグ初優勝を決めた瞬間、小学四年生だった筆者は、後楽園球場で古葉竹識監督（当時）の胴上げをバックネット裏から眩しく眺めていた。その年、遊撃手を務めていたのが、三村氏だったのである。現役引退後は、広島カープのコーチ・監督を歴任した。

歓喜の初優勝から30年の時を経て、憧れの野球人と懇意にさせていただいた時間は、筆者にとっては宝物である。米子松蔭高校が、2007年の秋に中国大会へ出場したときには、広島・呉市二河野球場まで応援に来てくださった（広島新庄高等学校に4 - 3で勝利して8強入り）。「勝っているときは、攻撃の時間を長くしなきゃ」と教えられた内容は、今でも教訓として胸に留めている。

三村氏は、広島カープの黄金期に二番打者を任され、犠打や進塁打などで得点圏に走者を進め、三番の衣笠祥雄、四番の山本浩二の適時打をアシストし、広島カープの躍進に大きく貢献した。ところが、三村氏によると、「当時は選手査定の方法について曖昧な部分が多く、やはり打率重視の傾向があった」という。よって、「給料には（年俵アップ）にはつながらなかった（笑）」と、犠打や進塁打がチーム貢献度に反映されなかったことについては、とても残念な様子であった。そして筆者にこう伝えた。「ぜひ仕事率を野球界に広めてよ」。筆者は、その

言葉を思い出しながら本稿を綴った。

ところで、従来の打者評価法（打率・出塁率）は、野球技術のみを計るものであり、野球というスポーツを通じた行動レベルから、打者評価を行うことは困難であった。従来の打者評価法を完全に否定するつもりはないが、既存の枠を一度は取り壊し、異なった観点から選手を評価していくことも今後は必要だと考えられる。

さらには、新しい打者評価法（純出塁率・仕事率）が、どのような社会心理的側面と関係性があるのかを確かめていくことも重要である。

参考文献

- (1) 廣岡知男（編）『学生野球要覧』日本学生野球協会（1996）
- (2) 八田英二（編）『学生野球要覧』日本学生野球協会（2011）
- (3) 神田順治『野球にはあらゆることがあてはまる』ベースボール・マガジン社（1977）
- (4) 佐塚元章『スポーツ好きは甲子園とオリンピックから始まった』文芸社（2018）
- (5) 朝西知徳『野球部活動を通じた高大連携の試み：羽衣学園高等学校野球部・創設の歩み』羽衣国際大学現代社会学部研究紀要8（2019）
- (6) 鳥越規央『9回裏無死一塁でバントはするな』祥伝社新書（2011）
- (7) デーブ・ウインフィールド『ウインフィールドのベースボール・バイブル』ベースボール・マガジン社（1994）
- (8) データスタジアム『野球の見方が180度変わるセイバーメトリクス』宝島社（2008）
- (9) クレイグ・R・ライト、トム・ハウス『ベースボール革命』ベースボール・マガジン社（1989）
- (10) 日本学生野球協会（編）『公認野球規則』ベースボール・マガジン社（2016）
- (11) 功力靖雄『野球の攻撃評価法に関する研究』筑波大学・大学体育研究7（1985）
- (12) 木下栄蔵『野球に勝てる数学』電気書院（1992）
- (13) 大山 正、藤永 保、吉田正昭（編）『心理学小辞典』有斐閣（1978）
- (14) 朝西知徳（編）『平成21年度卒業記念誌「光と影」Vol. 13：戦うに時があり』米子松蔭高等学校野球部（2010）
- (15) 加藤英明、山崎尚志『野球人の錯覚』東洋経済新報社（2008）
- (16) 川村 卓、中村 計『甲子園戦法』朝日新聞社（2007）
- (17) 朝西知徳『高校野球指導における新しい選手評価の試み』Baseball Clinic 6（1996）
- (18) 朝西知徳『甲子園に至るまでの心の研究』新風舎（2002）
- (19) 朝西知徳（編）『平成12年度卒業記念誌「光と影」Vol. 4：太陽がいっぱい夏の甲子園』米子商業高等学校野球部（2001）
- (20) ノーラン・ライアン、トム・ハウス『ノーラン・ライアンのピッチャーズ・バイブル』ベースボール・マガジン社（2010）